

## 書評

吉田傑俊『丸山眞男と戦後思想』  
(大月書店, 2013年)松田 博<sup>i</sup>

本書は著者による「近代日本思想論」三部作の第三部であり、『福沢論吉と中江兆民』、『京都学派』の哲学』に続く労作である。著者の基本的な視点は「戦後時代を歩み、それを形象化した代表的な思想家」である丸山眞男(1914-1996)について「丸山が戦後思想を代表しえた根拠」を解明することにある。丸山が没して15年、今年はその生誕100周年であるが「彼の思想への毀誉褒貶つまり賛美と批判は存命中からいままなお続いており」、思想史研究や戦後思想における丸山眞男研究はそれ自体ひとつのジャンルを形成しているといっても過言ではないだろう(都築勉『丸山眞男への道案内』吉田書店, 2013, 参照)。著者の視点は第一には、丸山は「アジア侵略と英米との15年戦争(1931-1945)を敢行した前近代的天皇制国家に対して、憲法に内実化した近代的制度と思想すなわち一般に『平和と民主主義』という戦後思想または理念の形成と定着に努力した優れた思想家であった」という点である。さらに第二には「丸山は戦後時代を思想的にリードするとともに、超然とした啓蒙家としてではなく『平和と民主主義』を劣化する時代方向と闘いつつも、それに規制される自らの状況をも率直に表明した」思想家でもあったからである。つまり丸山は「戦後時代の展開過程を規制しつつ、同時にまたそれに自らが規制されるという内在的相互関係」を示した思想家であった点を著者は重視している。それは丸山の〈真性近

代〉創出の理念と「擬制的な形態での近代を実現する仕方」で丸山を規制した「戦後時代」との間の「激しい交互作用」である(「序章」参照)。著者にとって「丸山眞男問題」が「現代のわれわれにとっても他人事ならぬ切実な問題」となるのは、この「激しい交互作用」が今日なおその現象形態は異なっても本質的に「持続」しているからであり、その意味で「問題としての丸山眞男」は「問題としての戦後」さらには「問題としての近代」を問うことに他ならない、というのが著者の視点といえよう。

著者は「丸山」の思想活動を「戦後時代の展開」に即して初期(1945-60)、中期(60-85)、後期(85-96)に分類し、それぞれ「マルクス主義への対峙を含む啓蒙運動期」、「『天皇制』イデオロギーへの対峙を伴う思想史研究期」、「新たな思想的模索期」と特徴づけている。というのは丸山の「思想活動」の特質を明確化するには、それと「戦後時代」との「激しく厳しい交差しあう関係」への視線が不可欠であり、それによって「丸山の戦後思想と戦後時代両者の意義と限定」の解明が可能となる。それはまた「思想家丸山眞男」に接近しようとするものにとっても丸山との「激しく厳しい交差しあう関係」という知的緊張関係が求められ、そうしてこそ「賞賛と論難から自由になった丸山論」が可能になるといえるのが著者の含意といえよう。

i 立命館大学名誉教授

## 1 丸山における「戦後思想の理念形成」

第一章において著者は丸山の戦前の論文「政治学における国家の概念」(1936)を彼の「思想出立」を示す「記念碑的論稿」,「丸山論の歴史のかつ論理的起点」として位置づけ,それが「政治学の中心問題である国家と個人の媒介と独立という問題を軸にして、『弁証法的な全体主義』の構想において,ファシズムの理論的把握とそこから脱却という根本的問題に理論的関心を集中していたことは確実である」と評している。また著者が「弁証法的な全体主義」という丸山の表現についてそれが「マルクスの歴史理念に接近」したものであるとの指摘は重要である。というのは著者は丸山の戦後初期の「思想活動」を「マルクス主義への対峙をふくむ啓蒙運動期」と特徴づけているが,思想家丸山のマルクス(主義)との「対峙」を含む諸関係の萌芽がすでに戦前の「思想出立」において示されていると考えうるからである。「ファシズムへの理論的対峙」を起点とした丸山はつぎに日本思想史研究を対象としつつ「ファシズムに抗する『近代』の可能性を探るという闘い」に移行していく。

著者は,丸山の『日本政治思想史研究』(1952)を「『近代』形成思想の原点」とし,「封建社会における正統的な世界像がどのように内面的に崩壊して行ったか」つまりそれは体制崩壊の「内在的な必然性」の探究にほかならず,その方法論的特徴を「思考範型の内面的な崩壊」過程を「下部構造の変動の衝撃」との関連において検証しようとする「唯物史観的方法の採用」であったと特徴づけている。封建社会の「正統的意識形態である儒教の自己分解過程」の解明は,同時に「日本においても近代が成立する思想的可能性と現実性」の解明に連動し,それは「戦前日本のファシズム期における記念碑的労作となった」と著者は評しているが同感である。さらに著者が注目するのが丸山思想史研究における「唯物史観的方法」である。それは「歴史と思想の連関

性」を前提としており,「社会の正統思想の分解と新しい思想の成立の『社会的根拠』が明瞭に解明されている」点にある。著者がいう「戦後初期におけるマルクス主義との対峙」の前提には「唯物史観的方法」の丸山なりの摂取と活用があった,というのが著者の強調点といえよう。著者は,同書にたいする守本順一郎や尾藤正英の批判の基本的内容を検討し,丸山の「自己批判」の内容を分析している。つまりそれは同書執筆時の歴史的状况としての「近代の超克」論蔓延のなかで,これに対抗するために「『近代』的諸要素自体の積極的追求に重点が置かれた」とことと関連している。また「この観点と方法が,丸山の戦後思想の理念形成にも繋がることになり,その光と影を表すことにもなる」という著者の指摘は的確と考える。

ここでは簡潔に次の二点を付言しておきたい。その第一点は同書において「唯物史観的方法は基本的に貫徹された」という著者の視点と,同書が「丸山の真の『近代主義』は,『前近代』と『超近代』をとともに射程から排除し,『近代』の実現にあくまで焦点を絞る傾向にあったと推論したい」という著者の視点とのあいだの関連性についてである。ここではこの両側面の関連性が,著者のいう丸山の戦後思想における「光と影」にも継承されているのではないかと,ということを述べておきたい。というのは評者にとって,この両側面の指摘は丸山の思想史方法論の形成過程の探究にとって有意義であるだけでなく,一般に近代思想史研究にとって重要な視点となると考えるからである。第二点は,守本や尾藤の批判にたいする丸山の真摯な「自己批判」の内容である。著者はそれを「正確かつ率直な自己批判」と評しており,ここでそれを詳述する紙幅はないが,評者は丸山の研究者,知識人としての「責任倫理」を示す真摯な態度が印象的であったということを付言しておきたい。

丸山は「1940年代から50年代にかけて,戦後日本の民主化すなわち憲法理念—平和と民主主義—の定着と発展に向けての理論活動とともに実践活動に専

念した」のであるが、著者は、丸山の「戦後初期の民主主義理念の形成」をその「理論的集約」である『現代政治の思想と行動』に収録された諸論文の検討を通じて考察している。この時期の丸山は「民主的な戦後時代の形成に向けての思想分析と実践的提起、輻輳する国際的な政治イデオロギーの解明、さらに現代における政治のあり方の論及において、きわめて現実的で鮮明な展開」を示した。それらは丸山の「戦後理念」の形成過程であったとともに「同時に『永久革命』としての民主主義理論の実質的開示の時期」でもあった。丸山にとって「戦後民主主義」理念の理論的実践的探究が、丸山の民主主義論を特徴づける「永久革命としての民主主義」論に集約されていくというのが著者の視点といえるであろうが、丸山のその後の民主主義論の展開を考える上でも重要な指摘といえよう。著者はこの時期の丸山の「理論的特質」としてつぎの三点を指摘している。第一には「原理的・演繹的な民主主義論の論理と、現実の経験的・帰納的な論理が立体的に交差され組み立てられている」ことであり、第二には「現実分析作用のなかで超越的原理がカッコにいれられることになった」こと、さらに第三には「『永久革命論』の視点から、前近代と超近代もしくは資本主義と社会主義をとともに批判・論難することになるが、そこにはすでに〈真性近代〉の追及に収斂される傾向がみられること」であるが、それはまた丸山にとって「戦後初期」から「戦後中期」への移行の過程における「一定の展開と転回」の萌芽でもあった。そこには丸山が「戦後初期」における「スターリン批判」との関連で「マルクス主義の思考法」を問題とし、それが「本質顕現」的思考法および「基底体制還元論」的傾向を有し、さらに歴史認識としては「歴史単線主義」として批判的に論じている点も含まれていた。丸山にとっての民主主義認識である「永久革命」としての民主主義論と上述の「マルクス主義の思考法」への批判的視点との「緊張関係」もまた「戦後中期」へと継続されていくのである。

## 2 「丸山政治学」の変容をめぐって

著者は第二章で丸山におけるラスウエルに代表されるアメリカ政治学の理論的摂取の過程を詳細に分析し、それを「1940年代から50年代にかけての実体的政治学から機能的政治学、またはマルクス主義政治学からアメリカ近代政治学への変容・転回」と特徴づけている。さらに「政治学におけるこのような変化が、丸山の現実政治に対する観点の変化に移行するのは当然でもあった」として、それがとくに「マルクス主義批判」に集約されると指摘している。マルクス主義への「対峙」から「批判」へ、について著者はつぎのように述べている。その第一点は「戦争責任」をめぐるものであり、著者は日高六郎、遠山茂樹、鶴見俊輔など当時の代表的知識人の丸山見解に対する批判的論評も含めて分析し—この個所は今日的な問題でもあり大変興味深い—第一には「戦争責任」における「クライム」と「エラー」との関係において「支配層と共産党指導者」つまり「戦争の遂行者とその防止に当たったもの」を「クライム（犯罪）」として「戦争責任」の観念で一括するのは「正当ではない」という点である。第二にこの問題における丸山の「結果責任」についても、著者は「その思想的・歴史的意義全体で評価」すべきであり、丸山見解は「エラーの判定」に傾斜したものであると慎重に言及している。その後の現代史研究によってこの問題は国際的な視野から豊富化されていくが、「クライムとエラー」の峻別は今日なお忘れてはならない重要な視点といえよう（たとえば鶴見俊輔の著作など）。評者は学生時代丸山の著書に引用されたドイツのニーメラー牧師の言葉に深い感銘を受けたことを鮮明に記憶しているが、これはまさにナチズム独裁を許した宗教者の「エラー」についての真摯な自己批判の言葉であり、そのような深刻な「エラー」を再び繰り返さないための歴史的教訓と考える（『現代政治の思想と行動』）。この点もまた著者の言う「毀誉褒貶から自由な丸山論」形成の

ための視点といえるであろう。さらに著者は丸山がマルクス主義の「巨大な思想史的意義」を認めつつも、それが理論・思想の「物神崇拜」, 「物神化」を促進したという見解に対して「現実において激しく対立・闘争する政治的両極を、思想的・実践的形態における共通性において捉えることは、巧みな図式化以上の意義はもちえないだろう」と鋭く指摘している。評者はこの評言をさらに深めるためにも丸山のマルクス思想にたいする「思想史的次元」とマルクス主義運動という実践的分野における「マルクス主義理論」という「理論史的次元」との相対的区別と関連において把握することが不可欠ではないかと考えている。というのは丸山の一連の著作における「マルクス主義批判」においては前者への言及が少なく、後者のほうが圧倒的に多いのではないかという印象を持っているからである。後者はわが国におけるマルクス主義受容の歴史的過程に明らかなように国際的な共産主義運動（コミンテルン）の影響とくにスターリニズムの影響が大きく、丸山の批判もスターリニズムに対する理論的批判の比重が大きいと考えるからである。「スターリン批判」の国際的波及のなかで明らかになったことは「マルクス思想」と「マルクス・レーニン主義理論」（この名称自体スターリンによるものであったが）との巨大な乖離、亀裂であった。この小論では詳述はできないが「丸山に対する毀誉褒貶」から自由になるには「マルクス主義にたいする丸山の毀誉褒貶」からも自由になることが必要ではないかという点を付言しておきたい。その意味でも思想史的次元と理論史的次元を区別と関連において把握することが必要ではないだろうか。著者の指摘の含意を評者はそのように受け止めたい。

さらに著者はこの章の最後に丸山の民主主義論の特質として「永久革命としての民主主義論」を検討している。丸山にとって民主主義理念は普遍的・超歴史的（歴史貫通的）な概念であり「近代資本主義よりも古く、いかなる社会主義よりも新しい」概念である。丸山は「それを特定の体制をこえた『永遠

な』運動としてとらえてはじめて、それはまた現在の日々の政治的創造の課題となる」と主張した。ここでは紙幅の関係でこの点を詳しく検討する余裕はないので別の機会に検討したいが、著者の見解は民主主義を丸山の提起も含めて「理念・運動・制度の連関」として、いわば「人類史」的観点から総合的かつ歴史的に検討することの必要性を強調したものと考えられる。またそれによってマルクス主義思想・理論における民主主義論と丸山思想における民主主義論との生産的な「対質」が可能になると評者は考える。というのは民主主義という人類史認識にかかわり、かつ歴史的規定性と思想的理念的普遍性との緊張関係においてその弁証法的統一を志向する思想こそが、丸山の視点とマルクス思想の視点とを「節合」しうると考えるからである。その意味でこの節での著者の見解を今後の丸山思想研究の問題提起のひとつとして受けとめたい。丸山とほぼ同時代のイタリアの政治哲学者ボッピオは「民主主義は社会主義のためにあるのではなく、社会主義が民主主義のためにある」と喝破したが、丸山のこの提起を思想史次元と理論史次元の相対的区別と関連において把握することが、著者の提起をさらに発展させるために有効な視点になるのではないか、という示唆を受けたこともあわせて付言しておきたい。

### 3 丸山における「古層」論の探究

著者は丸山の「古層」論探究の動機、展開について精密に分析しており、説得力のある内容であり、評者にとっても教示される点が少なくなかった。著者は第一に、丸山の「古層」論の動機や企図が「精神革命」の一環をなす積極的なもの、と位置づけている。丸山は「精神革命というのは口でいうほどやさしくない。たとえ現実が変わっても、ただ思考惰性としては、いろんな形のバリエーションとして生きつづけている」と述べているが、この「思考惰性」の問題は現代においても看過してはならない論点であることは明らかだろう。第二には、著者は「古

層」論が「丸山がかつて影響を受けたマルクス主義からの離脱」にかかわる点である。つまり「マルクス主義」の単線的歴史発展論では一国史の「個性」や思想史の「個性」を歴史的具体性において把握することはできないという点である。さらに著者は丸山の「古層」論の意図が「『古層』すなわち天皇制イデオロギーがいかに日本の思想を拘束し歪曲してきたかの解明」にある点を具体的に指摘している。丸山の視点はここから「シヴィック・ヴァーチャー」論と「古層」論との相克過程に展開していく。それを簡潔に述べれば第一には「古層」に制約されてきた精神的要素の「古層」自体を打破する契機への転換の探究であり、第二には「古層」の超歴史性の否定つまり歴史的性格の解明であるが、それは「古層」が「近代的・現代的形態においてもなお発現することの厳しい予測であり警告」にはほかならなかったのである。丸山は「政事の構造」論において歴史的に露呈する「権威（統治権の帰属者）と権力（実質的権力行使者）との二重構造」および「決定の無責任体制」が「天皇制国家の歴史的・思想的根柢」であることを指摘したが、「シヴィック・ヴァーチャー」論はそれにはたいする知的次元における「対抗戦略」であったといえるであろう。

#### 4 丸山における「真性近代論」の検討

著者は第4章において丸山思想（史）の中核的問題として「真性近代」論の「意義と限定」について考察している。著者は、丸山の「あるべき近代」創出の観点としての「永久革命としての民主主義論」や近代化とその主体（性）にかかわる「個人析出のさまざまなパターン」の問題提起、さらには「天皇制問題」などの検討を通じてつぎのように述べている。「一方で『前近代』批判を維持しつつ他方で『超近代』への進展を抑制しつつ、〈真性近代〉の創出にあくまで限定し専念するという丸山の思想戦略は、近代日本の『前近代と超近代の結合』の延長としての、矛盾としての『戦後時代』の問題性を敢えて引

き受けることにあったと理解できる。そしてまさにそこに、丸山が『戦後思想』を代表する意味と意義があったといえるだろう」。丸山のこの「思想戦略」は、近代日本の諸矛盾に「戦後日本」の諸矛盾が加重されて、それが「近代」認識をよりいっそう複雑なものにしていくが「丸山にとっては、前近代と近代が論理的には超近代に止揚されるということが認識されたとしても、じっさいの戦後の歴史的過程において（そして現在においても）その方向は決して単純で簡明でなかった」という著者の指摘は、丸山にかぎらず戦後の思想史研究に内在する問題であり、また「超近代」を直線的かつ単線的に「展望」することの困難性の問題でもあるが—丸山思想史研究の意義の一端がそこにあると考えるが—その意味でも丸山と「戦後思想」との関連についての著者の指摘は重要と考える。

著者はこの章の最後の節で「丸山ですら、みてきたような戦後時代における前近代、また前近代と近代の癒着の強靱さのまに、超近代を語ることなく、〈真性近代〉創出の射程からでることができなかったことにこそ、『戦後日本の数奇な精神史的運命』を感じざるをえないのである」と述べているが、それはまた丸山をはじめとする近現代思想史研究の優れた蓄積や丸山の「思想戦略」を「批判的に継承・発展」させるために、「近代を近代自身から超える」視点を豊富化させること、が著者の主張と考える。そのために著者は「第一に内側（近代）を超えようとするとき、当然にも外側（超近代）の展望をもつべきであり、第二にその主体には、近代主義とマルクス主義が分岐した市民性と階級性の結節点の観点を導入すべきであろう」と強調している。そこには著者の市民社会論研究の成果が反映されていると考えるが、紙幅の余裕がないので著者の『市民社会論—その理論と歴史—』（大月書店、2005）を参照されたい。いずれにしても著者の丸山思想（史）研究の「意義と限定」にかんする緻密で鋭利な研究は、「近代を近代自身から超える」視点の問題提起として説得力をもち、またそれは「丸山思想（史）を丸山自

身から超える」視点へと連動し、同時に思想（史）研究における近代主義とマルクス主義の建設的・弁証法的な「対話する精神」復興の萌芽を秘めた言明というのが評者の率直な感想である。

今年丸山誕生100周年の年であるが、丸山眞男研究の著作が数多くあるなかで本書は鋭い視点によ

って「丸山思想史」が、現代においても「他人事ならぬ切実な問題」であることを真摯に論証した力作と考える。本書が多くの読者とくに若い世代の読者をもつことを心から期待したい。

\* 著者の市民社会論については拙著『グラムシ思想の探究』新泉社、2007、の第6章を参照されたい。